SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

書評：
マリア・イサベル・デル・バル・バルディビエソ編『中世における水の認識』アリカンテ大学、2015年

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学人文社会科学部 公開日: 2018-08-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大原, 志麻 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00025666

〈書評〉 Mª Isabel del Val Valdivieso(ed.), *La percepción del agua en la Edad Media*, Universitat d'Alacant, 2015.
(マリア・イサベル・デル・バル・バルディビエソ編『中世における水の認識』アリカンテ大学、2015年)

大 原 志 麻

1．研究概要

本書はスペインのバジャドリ大学で長年カスティーリャ後期中世史の教鞭をとってきたマリア・イサベル・デル・バル・バルディビエソ教授が編者としてまとめた、中世の水をめぐる研究書である。2015年に刊行された本書を同年スペインでの在外研修中に直接ご恵贈頂くと同時に書評の依頼があったにもかかわらず、筆をとるのが今となってしまったことをまずはお詫び申し上げたい。評者は氏のもう一つの主要研究テーマであるカトリック女王イサベルやジェンダー研究について専ら師事しており、中世の水についての授業に参加はしていたものの、割り当てられて「15世紀におけるクエンカの水」についてのレポートを一本提出しただけの門外漢であることが、遅滞の理由でもある。しかし授業で学んだ都市における水をめぐる権力構造や法、そして紛争は、政治史の研究を進める上で、また他の研究を理解する上で役立った。そこで本書のもとをたどって、デル・バル・バルディビエソの水をめぐる研究を改めて概観したい。

生命の維持に欠かせない水への関心は、時代を超え人類に共通のものである。権力の基盤としてのコントロール、質と量ともに一定水準の水の確保、全住民に対して供給する必要、水が欠乏した場合の対策や水質汚染をめぐる紛争と合意形成などは常に想起される研究テーマである。デル・バル・バルディビエソは、1994年に最初の水をめぐる研究である「15世紀におけるスペインの水」をイタリアで発表[1]、1996年から1999年にかけて「中世カスティーリャ諸都市にお

[1] Mª Isabel del Val Valdivieso, "L'aqua nella Spagna del secolo XV / Water in Spain in the 15th Century", *Rassegna*, XVI, 57, Cipia (Italia) / Princenton Arch (Reino Unido), Milán, marzo 1994,

ける水」というテーマで助成金を得て共同研究を開始し、論文「後期中世カスティーリャにおけるセゴビアへの水の供給」[2]に続いてバジャドリ大学を中心とした9名の研究者による論文と最初の編著書である『中世におけるカスティーリャ諸都市における水と研究資料』(自身の論文「バジャドリ王立高等法院の文書における水」を収録)[3]を刊行した。引き続き2000年から2003年に助成を受けた「中世カスティーリャ諸都市における資源としての水」の研究代表者として、2002年編著書『中世末期におけるスペイン諸都市における水の社会的利用』(収録論文「水と都市空間における社会構成」を執筆)[4]を、2003年には単著『中世後期のカスティーリャにおける水と権力—中世末期のコンセホの権力構造における水の役割—』[5]を上梓している。2005年から2007年には「中世後期カスティーリャの都市社会の活性化要因としての水」で助成金を受け、2006年には再び編著『中世都市において水で生きること』(収録論文「中世末期におけるビスカヤの集落(ポルトゥガレテ)の発展における水の重要性についての考察」を執筆)[6]を出版した。2009年から2011年には「中世末期カスティーリャにおける水をめぐる紛争と合意」で助成金を受け、2016年に惜しくも亡くなられた親友でもあったバリャドリ大学のボナチア・エルナンドとの共編著『スペイン中世における水と社会』(収録論文「カスティーリャ王国の中世のフエロにおける水」を執筆)[7]を2012年に、その翌年には単著『中世における修道院と水資源』[8]を刊行し

---

pp. 49-53.

[2] Mª Isabel del Val Valdivieso, "El abastecimiento de agua a Segovia, en el contexto bajomedieval castellano", *Estudios segovianos*, Nº 94, 1996 (Ejemplar dedicado a: Homenaje dedicado a Don Hilario Sanz y Sanz), págs. 731-776.

[3] Mª Isabel del Val Valdivieso, "El agua en la documentación de la Real Chancillería de Valladolid", *El agua en las ciudades castellanas durante la edad media : fuentes para su studio* (coord. Mª Isabel del Val Valdivieso), Universidad de Valladolid, Secretariado de Publicaciones e Intercambio Editorial, 1998, págs. 97-124.

[4] Mª Isabel del Val Valdivieso, "Agua y organización social del espacio urbano", *Usos sociales del agua en las ciudades hispánicas a fines de la Edad Media* (coord. por Mª Isabel del Val Valdivieso), Universidad de Valladolid, 2002, págs. 13-42.

[5] Mª Isabel del Val Valdivieso, *Agua y poder en la Castilla bajomedieval: el papel del agua en el ejercicio del poder concejil a fines de la Edad Media*, Junta de Castilla y León, 2003.

[6] Mª Isabel del Val Valdivieso, "Apuntes sobre el protagonismo del agua en el desarrollo de una villa vizcaína al final de la Edad Media (Portugalete)", *Vivir del agua en las ciudades medievales* (coord. por Mª Isabel del Val Valdivieso), 2006, págs. 73-98.

[7] Mª Isabel del Val Valdivieso, "El agua en los fueros medievales de la corona castellana", *Agua y sociedad en la Edad Media hispana* (coord. por Mª Isabel del Val Valdivieso, Juan Antonio Bonachía Hernando), Universidad de Granada, 2012, págs. 65-94.

[8] *Monasterios y recursos hídricos en la Edad Media* (coord. por Mª Isabel del Val Valdivieso), Asociación Cultural Almudayna, 2013.

ている。このようにデル・バル・バルディビエソは主に中世後期のカスティーリャ諸都市における水の供給・消費・衛生そしてそれらをめぐる権力構造について研究を、４つのいわゆる科研費の研究代表者として進めてきた。

単独の研究論文としては、1998年に「15世紀におけるカスティーリャ諸都市における水の供給」[9]、政治権力と水の関係へと関心を拡大した研究「後期中世における水の統制と権力の行使の関係に関する考察」[10]、そして2003年には「なぜ今日中世における水問題を研究するのか？」[11]、研究フィールドの一つであるバスク地方に焦点を当てた「バスクの諸村落における水」[12]、川からの取水についての論考「水無くして村落なし。村落建設に際しては川の近くに場所が探される」[13]を発表している。また2008年には、水の表象も視野に入れた「よき都市政治の指標―中世カスティーリャにおける水の供給」[14]を、翌年には年代記作家ペドロ・ロペス・デ・アヤラの政治思想と絡めた「アヤラの年代記における水」[15]を、2010年には「15世紀カスティーリャ諸都市における水利」[16]を発表している。2012年には「ビスカヤのフエロにおける水」[17]と「水についての議会の財政と行政」[18]の２本の論文を刊行しており、政治、経済、財政と水との関係についての

---

[9] Mª Isabel del Val Valdivieso, "El abastecimiento de agua en las ciudades castellanas del siglo XV", Historia 16, Nº 261, 1998, págs. 46-53.

[10] Mª Isabel del Val Valdivieso, "Consideraciones en torno a la relación entre el control del agua y el ejercicio del poder en la baja Edad Media", *Cuadernos de historia de España*, Nº 77, 2001-2002, págs. 71-88.

[11] Mª Isabel del Val Valdivieso, "¿Por qué estudiar hoy el problema del agua en la Edad Media?", *Os reinos ibéricos na Idade Média: livro de homenagem ao professor doutor Humberto Carlos Baquero Moreno* (coord. por Luis Adao da Fonseca, Luis Carlos Amaral, Maria Fernanda Ferreira Santos; Humberto Baquero Moreno), Vol. 1, Livraria Civilizaçào Editora, 2003, págs. 1083-1089.

[12] Mª Isabel del Val Valdivieso, "El agua en las villas vascas del siglo XV", *Iacobus: revista de estudios jacobeos y medievales*, 2005, págs. 157-176.

[13] Mª Isabel del Val Valdivieso, "Sin agua no hay villas y para su fundación se buscaban emplazamientos cerca de los ríos", *Aranzadiana*, Nº. 127, 2006, págs. 114-115.

[14] Mª Isabel del Val Valdivieso, "Un exponente del buen gobierno urbano: el abastecimiento de agua en la Castilla medieval", *Musulmanes y cristianos frente al agua en las ciudades medievales*, Universidad de Cantabria, 2008, págs. 359-380.　本書はビジャヌエバ・スビサレタとの共著で前任校のカンタブリア大学とカスティーリャ・ラ・マンチャ大学との共同出版で刊行されている。

[15] Mª Isabel del Val Valdivieso, "El agua en las crónicas del canciller Ayala", *Autour de Pedro Lopez de Ayala* (coord. por Rica Amrán), 2009, págs. 220-235.

[16] Mª Isabel del Val Valdivieso, "Usos del agua en las ciudades castellanas del siglo XV", *Cuadernos del CEMYR*, ISSN 1135-125X, Nº 18, 2010, págs. 145-166.

[17] Mª Isabel del Val Valdivieso, "El agua en los fueros vizcaínos", *Mundos medievales: espacios, sociedades y poder : homenaje al profesor José Ángel García de Cortázar y Ruiz de Aguirre*, Vol. 2, 2012, págs. 1963-1976.

[18] Mª Isabel del Val Valdivieso, "Fiscalidad Concejil y Administración del Agua en la Castilla del Siglo

研究を深化させている。今回書評の対象とする『中世における水の認識』刊行後の昨年にも「紛争をもたらす水」[19]を発表しており、すでに20本以上の水に関する研究成果がある。

2.『中世における水への認識』

評者がデル・バル・バルディビエソに水の研究を始めた動機について尋ねたところ「中世都市社会の社会的経済的側面の研究材料として水に着目した」とのことであったが、確かに当初はバジャドリ大のお家芸である実証主義的な都市政治史研究の文脈のなかで水をめぐる研究が行われていた。しかし本書『中世における水の認識』のベースとなった、2013年から2015年に経済競争省から助成を受けた研究「中世カスティーリャにおける想像の中の水」からは、研究の視座が大きく文化史へと移っている。これは数多くある水についての研究の中でも珍しいテーマである。本書の翌年刊行された、編著『中世の想像の中の水—中世後期におけるイベリア半島諸王国』に収録された「祝別された水の効力と有用性—トルケマーダ枢機卿の祝別された水についての論考—」[20]では水と宗教文化の関係を扱い、また今年（2018年）は「カスティーリャの年代記における水と風景」[21]を刊行している。したがって本書は彼女が水についての研究を従来の実証主義的なアプローチから、テーマから、文化史的なアプローチに切り替える画期にあたるといえよう。

彼女の５冊目の編著である『中世における水への認識』は、中世後期カスティーリャ文学における水の表象、風景における水、文献資料における水の扱いに注目し、水の文化的諸相を照射している。水は人間のあらゆる活動に結び付く、一つの文化圏を映す鏡であり象徴である。本書では、多岐にわたるテーマを三部構成でまとめている。第一部は「実態から想像」、第二部は「記述に残

XV", *Revista portuguesa de história,* Nº. 43, 2012, págs. 105-128.

[19] Mª Isabel del Val Valdivieso, "El agua de la Discordia", *Días de otoño, tardes de archivo,* 2017, págs. 24-38.

[20] Cristina de la Rosa Cubo, María Isabel del Val Valdivieso, "De effectu et utilitate aquae benedictae", El tratado sobre el agua bendita de Johannes de Turrecremata", *El agua en el imaginario medieval: Los reinos ibéricos en la baja Edad Media* (coord. por Mª Isabel del Val Valdivieso), 2016, págs. 313-337.

[21] Mª Isabel del Val Valdivieso, "Agua y paisaje en las crónicas castellanas de la Baja Edad Media", *Wasser - Wege - Wissen auf der iberischen Halbinsel: Eine Annäherung an das Studium der Wasserkultur von der römischen Antike bis zur islamischen Zeit,* (coord. por Ignacio Czeguhn, Cosima Möller, Yolanda María Quesada Morillas, José Antonio Pérez Juan), Nomos, 2018, págs. 285-304.

る表現。著述から公文書まで」、第三部は「キリスト教、イスラーム教、ユダヤ教の文化における水の象徴的な使用」と分かれており、全部で15名の研究者が寄稿している。

第一部「実態から想像」では、バスク大学のホセ・ロドリゲス・フェルナンデスが「アラベサの公共泉水における水、権力、ソシアビリテ、性差」と題して、公共泉水や洗濯場の位置の重要性と普遍性そして集団生活における水の多義性、水を巡る男女の性差を問わないソシアビリテや、また景観における水のプレゼンスがいかに「よき統治」という社会における権力の誇示につながるかをまとめている。続く論文では博士論文の成果としてミリアム・パラ・ビジャエスクサが「危険な水、役立つ水：14－15世紀のバレンシア王国南部の湿地における概念形成と実際の生産力」と題して、疫病の源と認識されていたオリウエラの湿地の負の側面と、牧草地や農地としての生産力が高い利点を論じ、考古学調査のデータを用いて中世後期バレンシアの風景を再構築している。エンリケ王子大学のバス・デ・フレイタスは、カスティーリャ王国からポルトガル王国に場を移し、「愛の庭園」と「天上の庭園」における公共泉水の中心的役割と、15世紀と16世紀の時祷書を具現化した装飾について、豊富な図版を用いて論じている。実際の風景と装飾における想像上の風景を対比させながら、地上の楽園において欠かすことのできない水と、それが奇跡を与える性格を帯びるようになった理由、また水がどのような幻想を与えたかについて独自の論を展開している。続く二つの論文は海を題材としており、ラ・ロシェル大学のミシェル・ボチャカとアリサガの共著論文では、1290年以降の航海知識の蓄積を通じて、中世末期の海の表象、とりわけ大西洋が地図においてどのようにイメージされたのかを、グティエレ・ディエス・デ・ガマスの旅行記を用いてまとめている。続く第一部最後のイシュトバン・シュサスディ・レオン・ボルハの論文では大西洋から新大陸における水をテーマに、ラス・カサスの『コロンブス航海日誌』を分析し、また地上の楽園を探したコロンブスや若返りの泉を探索したポンセ・デ・レオンの記述を通して、地上の水に関する想像上の動物や当時の心性を紐解いている。

第二部「記述に残る表現。著述から公文書まで」では、まずバジャドリ大学での評者の同期生で、その後リスボン留学を経て現在コインブラ大学に勤めているコバドンガ・バルダリソ・カサノバが、ペドロ１世からエンリケ３世期に至る４代のカスティーリャ王の治世にわたって年代記作家を務めたアヤラの記述の中から、気候、消費、地理的境界を定める役割、そして特に1353年から1404

年のグアダルキビル川の拡張といった水に関わる言説を取り上げ、15世紀カスティーリャ王国の地政学をまとめている。論文中にあるエンリケ3世期の「戦争に勝ちたい者は水を制すること」という言葉は印象的である。現在バジャドリ大博士課程に在学しているディアナ・ペラス・フロレスは、15世紀の宮廷文学や騎士道小説における水の表象を広く取り上げ、公共泉水の宮廷と日常生活におけるソシアビリテの核としての役割や、川と人生の類似、そして水が多産、豊穣、生命の源を表すとともに冷たく湿っていることから女性や色欲などを意味すること、また『アマディス・デ・ガウラ』の冒険において、水がガウラに対する危険として立ちはだかることなど、中世カスティーリャの主要文学作品に表れる水の表象の肯定的な面と否定的な面を整理し、その両義性を提示している。デ・ラ・ロサ・クボは14世紀の医学書における水の記述に着目し、衛生、栄養、薬の観点から清浄で澄んだ水は常に治療と結びついていること、また奇跡を起こす魔法の水はそのまま医学的にも用いられること、入浴もまた医療行為であり、病気を引き起こす不潔さは水によって治療できると考えられていったことなどについて興味深くまとめている。ペレス・ロドリゲスは8世紀から1230年までのサン・ビセンテ・デ・オビエドやベルモンテ修道院の外交文書に表れる語彙から当時の水の認識をまとめている。

第三部の「キリスト教、イスラーム教、ユダヤ教の宗教文化における水の象徴的な使用」は、一貫性を保つことが困難な論文集の中にあって、分担執筆者間でテーマがよく共有されており、中世カスティーリャの大きな特徴である三宗教の文化における水のシンボリズムの諸相を聖俗両面から洗い出す、最も重要な章となっている。ピカルディ大学のリカ・アムランはイベリア半島に1世紀から存在していたユダヤ人が15世紀に回収し新キリスト教徒となってからもコンベルソ問題に直面するなか、日常生活において重要とされた入浴によって心身を清めること、清掃、屋内の沐浴の設置場所や、祈りの前に手を清めること、遺体を洗浄してから屍衣に包むことなど、水の扱い方のために異端審問によって追及された点を列挙し、改宗後も水の利用方法が変わらなかったために異端視されていく様子をまとめている。この論文は信仰における水の重要性を再認識させる。アンダルシア地方にイスラーム浴場の遺跡は多々あるが、コルドバ大学の考古学者ベレン・バスケス・ナバハスは、これまでの考古学調査の成果から、洗浄式の場の具体的な配置や目的についてモスクや浴場の重要性を詳述している。続く論考では、文献資料を用いてアンダルシアの都市における水利、宮廷装飾、葬式などの儀礼から、神からの恩恵と懲罰としての水の両義

性についてまとめ、浴場のソシアビリテの機能についても触れている。コンプルテンセ大学教授クリスティナ・セグラ・グライニョは、キリスト教における天地創造と大洪水にみられる水の両義性などを前提に、マドリッドのマンサナレス川とグアダラマ川を中心に民衆信仰における魔法の水と聖なる水のイメージを描出している。またヒメネス・ラジャドは同じくマドリッドに関連して、9世紀にムハンマド1世によって建設されたマドリッドがいかに干ばつに悩まされ、雨ごいの儀式を行ってきたか、そしてそれがキリスト教化された後も途切れることなく、聖イシドルスやアトーチャのマリアを介しての雨ごいのミサとして、また逆に大雨を止める祈願をするかたちで継続していったかのメカニズムを纏めている。

水に対する中世の人々の認識というテーマは、長期にわたる実証研究の積み重ねながければ成し遂げることができず、本書は水研究に関する多様な選択肢を提示するものである。しかし新しいテーマであり、また話題があまりに多岐に渡るため、相互の研究の連関が掴みづらく、第三部以外ではテーマ設定の難しさを感じた。また本書が中世末期カスティーリャ王国に時代と地域を限定している以上やむを得ないが、他の領域との比較がないため、その独自性があまり見えてこない。同時代の他のヨーロッパ諸国を視野に入れた比較があれば、よりカスティーリャ王国の独自性がわかりやすくなるように思う。また編者のデル・バル・バルディビエソが序章と終章しか書いていないのも物足りない。本書からカスティーリャの水の持つ歴史的特性は鮮明に浮かび上がってくるものの、これを里程標として他の地域との比較史研究の新たな展開に向けて、このような研究がさらに続けられていくことを切に期待したい。

また本書が翻訳を通して様々な読者の目に触れることを祈りたい。我が国においてまだ成果のない中世カスティーリャ王国における水という研究を進めていくにあたり、本書は欠くべからず貢献であり、またそれぞれの論文の脚注には多くの資料情報を見出すことが出来る。本書が日本語で容易に読むことができるようになり、多くの読者によって幅広く読まれ、その成果が分かち合われ、本書が示した意義深い議論に一人でも多くの人が加わることを願ってやまない。さらに本書が、他の地域の歴史を専門とする研究者にも大いに読まれ、水をめぐる歴史研究さらに豊穣な学問領域となることを期待したい。

スペインでも研究者が多忙化しているが、デル・バル・バルディビエソ氏は1998年から2006年までバジャドリ大学副学長を務めており、評者が論文の指導を受けに行くのは彼女の研究室ではなく、常にサンタ・クルス宮殿の本部棟に

ある執務室であった。スペイン王立歴史アカデミー初の女性会員でもあるため、連絡するといつも出張先であったが指導に手を抜いたことはなく、週末であっても相手をして下さった。雑務に忙殺されながらも「研究は一度やらなくなったら終わり」と、水という壮大なテーマの研究代表者を続けられていた。評者がスペインで何かしら編者と関係のある研究者に会うたび、その人脈の広さとバイタリティに感服させられたものである。デル・バル・バルディビエソが研究成果をコンスタントに世に問うていることに対して、改めて心から敬意を表すとともに、今後どのような切り口で水を構想するのか注目したい。評者の能力不足から誤読や理解不足が多々あることは想像に難くない。以上的外れな解釈や指摘もあると思われるが、その点についてはご容赦を願うばかりである。本稿が本書に対する関心を引く一助とならば幸いである。中世カスティーリャ王国の魅力を多角的に確認して頂けることを願いつつ、拙文を閉じたい。